

A study on practice for teaching art from the view of sensibility

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/24690 |

感性的視点にたつ図画工作科授業の試み

山田一美 北嶋葉子*₁₎ 西井康子*₂₎
平野るり*₃₎ 正木真紀子*₄₎ 宮本美恵子*₅₎

A Study on Practice for Teaching Art from the View of Sensibility

Kazumi YAMADA Yoko KITAZIMA Yasuko NISHII
Ruri HIRANO Makiko MASAKI Mieko MIYAMOTO

はじめに

2年間という期間は、研究員の学校区が別々でそう頻繁には集まれない状況の中では決して長いものとはいえなかった。街の中心部の大きな学校、郊外の住宅地にある学校、自然に恵まれた山あいの小さな学校と、研究員がおかれた環境は変化に富んでいた。しかし、それぞれが実践を持ち寄って話し合い、授業を参観しあう中で個々バラバラであった実践が“感性による教育を意識した実践・研究が今、求められているのでは……”という点で共通した思いに立つことができた。

これまでの図画工作科では「豊かな心と表現力を育てる」ことを目標とし、主に個性的な表

現力を身につけることを目指して、新しい素材の発見や効果的な素材の与え方、導入のあり方などについて、多くの研究が進められてきた。

ふだん、教室の中では積極的に造形活動を楽しむ子ども達の姿が見られる。しかし、せっかく作った作品を無造作に置き捨てたり、丸めてしまうなど、自分の作品に対する思いが希薄であったり、授業の場をはずれると作品のモチーフを既存のキャラクターや漫画に求める傾向が強い。こうした子ども達は自分自身の作品の良さや、自分の造形感覚に自信がもてないでいる。それは教室という空間の中では、指導者の与えられた価値観のもとに、指導者のねらいに合致した作品をその代弁として制作するため、真に自分自身のものになっていないことが原因

平成8年3月30日受理

*1)金沢市立中央小学校

*2)金沢市立大徳小学校

*3)金沢市立米丸小学校

*4)金沢市立犀川小学校

*5)金沢市立西南部小学校

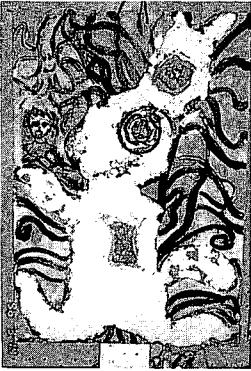


写真3

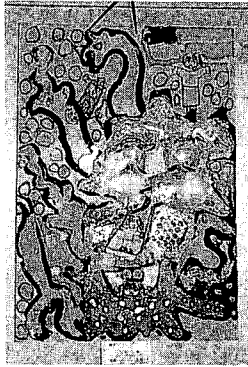


写真4

んどん新しいことを考えだす。その瞬間、作品製作の意識よりも、工夫することの喜びに走ってしまう傾向があるので、指導者は、作品にもどるよう、アドバイスをしなければいけない。

昨年も本題材に取り組んでみた。しかし昨年の場合、かなり指導者側が1つの材料(新聞紙)にこだわりすぎて、本来の児童の欲求を満たしてあげることができなかったように思う。

彼らの感性を引き出し、磨くということは、決して押しつけからではなく、彼らが自ら取り組みたくなるような資料の提示、教材の構造の工夫が大切であると感じた。(北島)

II 「写真で表現しよう」実践例2 4年

中学年にもなると、子ども達もそろそろ写実的な表現に目覚めることもある。とくに描画の場では、自分の作品と友人の作品を較べ、絵が下手であるという思い込みから、描画の場では、対象から感じた興味・関心よりも形が単純で描きやすい対象をモチーフとして選ぶ傾向にある。これでは本当の感動が表現の場に現れないことになるので、描けないという自己規制の枠を取り除き本当に興味ある対象に目を向けさせるために、「描く」という表現方法から離れて「カメラで被写体を撮る」という題材を設定することにした。

第一次では題材「おもしろ発見隊」ということで、子ども達がおもしろい、美しいと興味・

関心をもったものを何でも撮影してみようと出発した。子ども達は、この日常見慣れた風景の中で何をとってよいのか戸惑いがあったが、1枚1枚と撮りすすむにつれ楽しく夢中になり、日常の中の新しい自分の風景がその子の感性の表現になっていったように思われる。また、時間の経過とともに、カメラの扱いや撮影に慣れ、楽しみながら授業に参加していた。授業は4人に1台のカメラでグループとして行動したが、グループ内でお互いに刺激しあいながら、「おもしろい」と感じる対象を撮影し、作意を持って写してみたり、同じ樹を撮るにしても、見る方法を変えるなどして工夫する場面もあった。授業後の感想では「絵は自由に描けるのが写真と違っていいけれど、写真はおもしろいものが、すぐにいっぱい撮れるから楽しい。」「写真はうまい人・へたな人の関係がなくてミスがないかぎり写真になってそのまま写るけど、ちょっと色が違ってている。」(Nの感想・写真8参照)などの意見が寄せられた。興味や関心をもった対象を、自分の技能とかかわりなく「見ること」によって、新しい見方・感じ方が生まれ、被写体と感情が共振する中で新たな

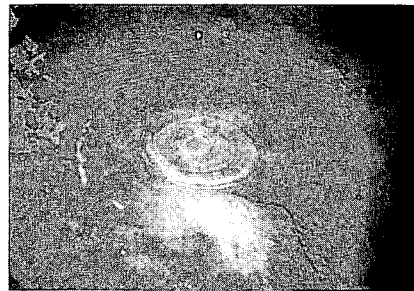
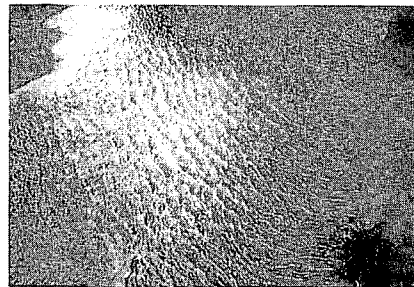


写真5・6上下「大きな水たまり」

「ボンと石を投げて、その波紋がおもしろかった。」
(A男)



「風が吹いてきて、風でできた波を写して見たかった。これは私に絵に描けない。」(M子)

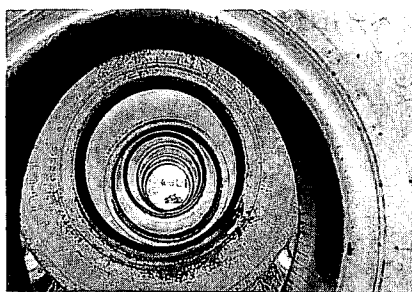


写真7 「タイヤの下に」

「アスレチック広場で何かを撮ろうと思ったら、タイヤから遠くが見えた。」
(S)

楽しそう。」「きれいだね。」と感想を残しているように、いつもと違う風景にとびきりの興味・関心をいただいた様子がかがえる。

このように造形が環境に働きかけることが、子ども達の視覚に新しい感性を開かせたようである。自分達の城をつくるような気持ちでつくったパラソルワールドに、子ども達は様々な反応を示してくれた。

「水色のテープが風にゆれ、太陽の陽があたっているととてもきれい。」「みる方向を変えると、ちょっと違って見える。」(写真9・10)



写真8 「風に舞うふくろ」

感情が生み出されたように思う(子ども達の写真3点と感想を参照。写真5・6は、2人の児童が6月のアスレチック広場にできていた大きな水たまりを撮ったもの)。

第二次では、「パラソルワールドを撮ろう」という題材で、1時限目に「アスレチック広場を利用し、グループ別にいろいろな色の傘を組み合わせ、パラソルワールドをつくろう」という目標をもとに造形活動を行った。2時限には自分達がつくった「パラソルワールド」を被写体とし、いろいろなアングルからカメラで写すことで、自分の思いを伝える写真を意識づけることとした。結果として、子ども達は「パラソルワールド」をつくることに夢中になり、傘の重ね方や色の配分をどんなふうにも組み合わせればよいかと、グループの中で話し合いを重ねながら活動していた。授業は4時限と5時限の間に昼食がはさまれていたこともあり、子ども達は昼休みや休息もろくにとらずに制作に励んでいた。授業後、アスレチック広場は花が咲いたように華やかに彩られたので、低学年がめずらしく見学に現れた。その子ども達が「先生、

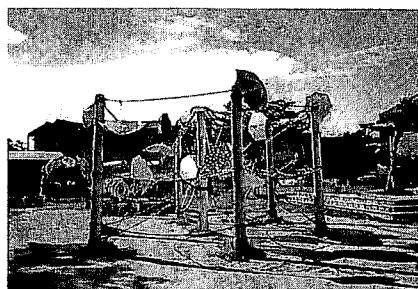
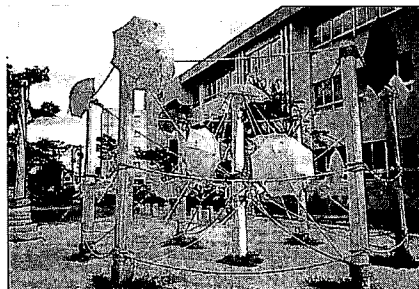


写真9・10 「すずしいパラソルワールド」



「傘の模様が太陽の光を通してとてもきれい。下にいると何だか暖かな気持ちになれる。傘でもっと何とかしてみたい。」(写真11・12)

「みんなで頑張ったので、最後に1枚、みんなで写しました。」(写真13)

カメラがずいぶん身近なものとなってきた。ちょっとした店には使い捨てカメラが置いてあり、誰もが手軽に写真を撮れる時代になってきた。本題材が1つの糸口となって、風景の中に自分が「見た」ものや、自分が探し出した被写体の中に自分の思いを込めて写真を撮ることができれば、子どもは写真のもつ芸術性・表現の

し、一人一人が想像を働かせ、懸命に感じとらせようとしていた。その段階では教師側の最後の説明で、子どもの見方がさらに深まればという思いで加えた作品の解釈は、不必要であったと思われる。というのも、子ども自身はそれぞれに十分に深まった見方ができており、その感動を大切にすることが最も重要であろう。

また、吹き出しを使って、音や声を想像させることは、子ども達の意



写真16



写真17

欲づけに適していたと思われる。しかし、教師自身がそれぞれの短い表現に感動し、掌握できなければならぬと反省させられた。

1枚の絵を部分から見ることでじっくり見る活動へと育てていきたいという思いから、スライドで導入段階に6枚の拡大部分を映し出した。

『ゲルニカ』は、大変大きな作品であり、それに近づけて鑑賞させたかったが、スライドでもコピーの複製画でも、それぞれの機器の問題があり、名画鑑賞のレプリカの限界が感じられた。

それでは教育現場での名画鑑賞が不可能であると言い切ってしまうと問題である。「作品がわからない」のは、見る側のせいだとされていた、従来の鑑賞教育では、作品に合わせた見方が要求される例が多く、知識的理解に偏った名画鑑賞しかできなくなってしまう恐れがある。

各自の感じ方を大切にし、感性を育てることにつながる名画鑑賞の可能性は、鑑賞教育における重要な課題であろう。(平野)

IV 大地の中のクリスチーナ (鑑賞)

実践例4 4年

1. 主題設定の理由

(1) ねらいとするものについて

鑑賞の指導は、表現の指導に関連させて行うことが原則であるが、表現の指導のためのものではなく、児童が思いのままに感じ、味わう鑑賞が大切である。他人の目を借りた見方ではなく、自分の感性を通じて絵を見ることにより、絵が語りかけてくるものを感じとらせたい。また、絵との対話によって、作者の人物や感性、主張に触れることのできる授業でありたい。

(2) 資料について

アンドリュー・ワイエス作

『クリスチーナの世界』

ワイエス(1917年生れ)は、田舎の風景や大地を相手に野生的な暮らしをしている人々を写実的に描いたアメリカの画家である。しかし、彼の作品は単なる写実ではなく、純粋なものの中に何かを暗示させるものが多い。この絵から、障害をもつともせず、苦痛を克服しながら、感傷に溺れず、強く生きたクリスチーナに対して作者が寄せた友情と尊敬の気持ちをとらえさせたい。

(3) 感性を育てる手だて

① 資料との出会わせ方の工夫

風景写真を提示し、アメリカというと都会的なイメージが強いが、牧草が広がった自然がいっぱいという点にも目を向けるようにする。

② 多様な考えを出させる工夫

絵を見た感想を自由に発表させる中で特にクリスチーナに的を絞り、どんな人か何を見て何をしようとしているのかと問うことにより、その子なりの思いをつかませたい。

③ 今までの自分に気づき、新しい生き方を考えさせるための工夫

ワイエスがなぜクリスチーナの絵を描いたのだろうと想像させ、クリスチーナに声をかけることで、大地の中で障害にもめげず誇り

高く生きたクリスティーナへの思いを、その子なりに想像させたい。

2. 授業の流れ

(以下は教師・児童の発言や行為。T：教師、C：児童)

- T アメリカってどんな国か知っている？
 C 広くて、明るいところ。
 C 人口が多く、ビルや町がたくさんある。
 T アメリカってこんなイメージかな？(写真) 実はこれもアメリカなんです。(写真)
 C 空気がきれいで、自然がいっぱいだ。
 T 「クリスティーナの世界」を提示する。
 T 何がみえますか？
 C 女の人、 C 家、 C 枯れた草原、
 C 空、 C 道の跡、 C さく、
 C かげ、 C 家の出入りするところ、
 C 地平線、 C 小屋
 T 絵を見て思ったこと、気がついたことを書いてみよう。
 C 写真みたいに立体的で、静かな感じで草原に風が吹いていた。
 C 女の人が遠いところを見ているようだ。草の色が秋みたい。
 C 絵がとてもきれいで細かいところまでよくわかる。暗い絵だ。
 C クリスティーナが小屋から出ている鳥を見ている。
 C 女の人が悲しそうに地平線を見ている。家には誰も住んでいないみたい。
 C 広い草原にいるのは楽しそう。
 T 女の人は何を見て何をしようとしているのかな？
 C 空を見て飛ばたいと思っている。
 C 小屋の鳥を見て飛ばたいと思っている。
 T 感じたことは何でもいいよ。
 C 旅にでたい。 C 家にすみたい。
 T ワイエスさんはどうしてクリスティーナの絵を描いたのかな？
 C クリスティーナがすてきだから。

- C アメリカを見てほしいから。
 C 世界にこんな寂しい人がいるんだと知ってほしいから。
 C クリスティーナさんが描いて描いてといったから。
 T クリスティーナさんについてのお話を聞きましょう。「……省略」
 T 何か一言クリスティーナさんに声かけしてあげてください。
 C 足が不自由だけど、これからもがんばってください。
 C 足がまた元に戻るといいね。
 C 早く自由な生活になってね。
 C 苦しい生活でもがんばって生きてね。
 C 自分のことは自分でするなんてえらい。

3. 考察

(1) 感性を育てる手だてについて

① 資料との出会わせ方の工夫

アンドリュー・ワイエスは、現代アメリカの都会よりも田舎を愛し田舎に住んだ画家である。描かれている風景には、まさにワイエスの生き方、考え方が凝縮されているといえよう。いきなり絵を見せるよりも、作者がこだわった田舎にそれとなく児童の意識が向くように、田園風景が広がった静かなアメリカに出会わせたいと思った。そのためには、まず子ども達にアメリカをどのように認識しているのか質問した。その結果、明るくにぎやかで、機械文明の発達した都会のイメージが強く出された。しかし都市が抱える負の部分、犯罪が多いとか空気が汚れている等は出されなかったものの、アメリカからは、田舎や自然をイメージする子はいなかった。そこで、子どもがよく知っている都会的なアメリカを写したビルの写真と、田舎の緑の丘に建つ白い家が写った風景写真を対比して提示し、アメリカの田舎のイメージにも目を向けることができた。

② 多様な考えを出せる工夫

鑑賞は、その子なりに思ったり感じる事が

大切である。感じてこんな事を話したら笑われないかとか、間違っているのではとか思ってしまうと、いくら思いをプリントに書いても、話し合いは深まらない。まずどんなことでも、何を話しても良いのだ、あなたがそう考えることが素敵なのだということをクラス全体に理解させておくことが必要であろう。

また1枚の絵を鑑賞するときに、話し合いの共通の土台をつくるようにした。「何が見えますか。」と問い、描かれているものをみんなで確認し合ってから感想を書くようにした。地平線や道の跡など見つけたのは大変な驚きだった。

共通の土台にたってから「絵を見て思ったこと感じたこと」をプリントに書くようにした。

女の人についての感想は、次に教師がねらいたかった発問<クリスチーナは何を見て、何をしようとしているのかな。>につなげていった。空や小鳥や地平を見て、自由に空を飛びたい、旅に出たい、雲になりたい、身軽になりたいという意見が多く、クリスチーナの足は不自由だったことを教えなくても似た雰囲気ですでにつかんでいたことは、子ども達がすばらしい感性を持っていたといえよう。

③ 今までの自分に気づき、新し生き方を考えさせるための工夫

ワイエスがなぜクリスチーナの絵を描いたのかと問うことにより、作者の人となりや考え方、生き方をその子なりの思いでとらえることができた。それはその子らしさを見出すことにもなった。

クリスチーナさんへの声かけでは、優しい思いやりに満ちた暖かい言葉が発せられた。子ども達にとって、クリスチーナの世界から感じるものやワイエスという画家の存在そのものが新しく興味のあるものであったと思う。

(正木)

V 「フワフワクッション」実践例5 5年

1. 題材設定の理由

- ・色と形が自由に楽しめる。
- ・素材が新しいので新鮮に取り組める。
- ・作ったあとつるしたり、貼ったりして部屋を飾ることができる。
- ・空気の袋をいれてふくらませるので生命感がでてくる。

以上の理由で子どもが意欲をもって取り組むと思われる。また、色や形を自由に表現するといっても何もしないで放っておいては、イメージも湧かないし、本当の意味での色や形を楽しむことはできないであろう。だからといって作品例を見せてしまったのでは、表現の幅が狭くなってしまいます。そこで視るという視点から感性を磨き、子どもが満足できる表現をさせたいとの思いからカンディンスキーの抽象絵画の作品を鑑賞することにした。カンディンスキーの作品を選んだのは、色や形を楽しんでいること。色彩が鮮やかであること。リズム感や動きがあること。そして、子どもが心の中を表現するときに物をそのまま描くだけではなく、色も形も自由に表現できることを知ってもらったためであった。こんな表現の仕方もあるんだと知ってもらいたい。そして心が飛び跳ねていくような、感じをつかめたらと願った。

2. 授業の流れ

カンディンスキーの作品鑑賞（実物投影機による）1時間

↓
不織布に形や色をぬる（ポスカと絵具）

↓
はさみで形に切る

↓
ボンドでまわりをつけて袋にする

↓
中に荷づくり用の空気袋をつめる

↓

ボンドやホチキスで口をふさいでしあげる

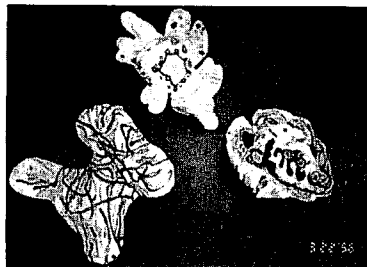


写真18

3. 考察

子ども達が作品をつくる上で美的価値を見出し得るかどうかが今後の意欲や創造性を高めていくカギとなると考えられる。そこでどれだけ多くの美しいものを見たり、ふれたりするかが大切である。それも成長期に多くを体験させたいと考える。今回の授業ではカンディンスキーの作品鑑賞をしたクラスと、しないで作品づくりをしたクラスで実験をした。その結果、鑑賞したAのクラスは取り組みも早く、意欲的に製作していたと感じられた。またできあがった作品も自信をもった力強さがあり、色も鮮やかである。作品の傾向が似ているものもあったと思われるが。それに対して、鑑賞しなかったBクラスは、最初の取り組みでイメージがつかめないのか、なかなか進まなかった。一人が線模様を描くと線模様が広がり、どうしても具象形体を描いてしまい、抽象形はほとんどでない状態であった。それは、抽象形の絵を知らないのであるから当然のことだと考えられる。

これはほんの一例でしかないが、やはり、一人一人の個性を生かすといってもそれぞれの感性を耕さなければ、未来のその子らしい力は発揮されない。そのために、教師は、できるかぎりの感性を磨く場を設定し、機会あるごとに、視せたり、聴かせたり体験をさせたいものである。

4. その他（掲示委員会の活動）

4年前から掲示委員会の担当している場所がいくつかあるのでそれぞれの特徴を出して継続

して行っている。その1つに名画の模写を掲示している。子ども達が名画にふれることは少ないので、毎月一人の画家の作品を3～4点模写して紹介し、少しでも知ってもらいたいと思っではじめた。模写といっても子ども達が描くのであるから大変である。この学校に実物投映機があり、名画の本をそのまま拡大することができたので形は投映したものをかくことにした。

しかし、それでも彩色には時間がかかり大きさも最初は模造紙全版の大きさを使っていたので大変な労作業であった。幸い掲示委員の子ども達は、とてもまじめで毎日昼休みや放課後に集まっては少しずつ描き、1カ月かかって仕上げてくれた。今、思うと本当によくやっていたなと感心する。校内に掲示が変わるたびに、子ども達や先生から反響があり、委員会の子

写真19



写真20

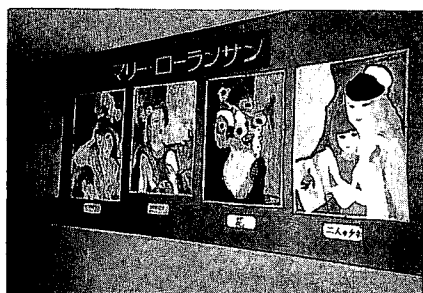


写真21



達も満足する一瞬である。今までにピカソ、ゴッホ、マティス、マグリット、写楽、ローランサン、ミロ、等紹介してきた。委員会の子ども達もメンバーは入れ替わっているが仕事の内容はわかっているので意欲的な子ども達が集まってくるようになった。今は、毎月というのは負担がかかるので2カ月から3カ月かけ、大きさもパネルを使うことにして半分くらいにしたので無理のないように進められるようになった。

それでも毎日図工室に集まって、教師がいまがいが自分達で仕事を進め、時間がくればきちんと後片づけをして帰っていく。教師のすることは、次はどの画家にするかの相談としあがりを見て、いつ張り替えるかを定めること、画家の名札をつくることだけになってしまった。後は全部、自分達でパネル貼りから、とりはずしまで行っている。積み重ねの成果に驚く。その間、子ども達が少しでも色彩の美しさ、構図のおもしろさ、絵の楽しさにふれてくれたと思う。授業の中で作品を紹介したり、教科書を見ていて作品が出ていたとき、子ども達が「アッ、廊下にはあってあった絵だ。」と親しみをもって言うことがある。

今、直接、子どもの表現に効果があるとは考えていないが、子ども達がこれから大人になって絵にふれたとき、なつかしい思いでどこかで見たことのある絵だと感じてくれたり、自然に生活の中に絵があると心が豊かになると感じてくればと考えている。教師自身もこの廊下を通るのが楽しくなっている。

日常生活の中で美的な価値を感じとれる環境づくりも美術教育の大きなねらいである。

(宮本)

おわりに

感性を伸ばすには、特に図画工作科においては、対象をみて自分なりに感じ、表現することが基本であるとの認識に立ち、各人の授業を

“感性を伸ばす”という観点からどのような成果があったのかとらえてみた。

見て感じ取るという点では鑑賞の授業があげられよう。絵を見るときに他人の目を借りた見方によらず、権威にも頼らず、自分の感性を通して絵を見る姿勢が大切だと言えよう。同じ絵を見ていても、個々の考え方や感じ方の違いで多様なとらえ方があることを子ども達は学びとったようである。自分の主張が認められ、自信を持つことにもつながったようである。また、作品を通して作者の高い人格性に触れたとき、鑑賞が心の教育にもつながる可能性を感じた。

図画工作科では、表現することが重要な目的であるが、単なる表現ではなく、見て感じることを表現に生かし、表現の幅を広げ、広がることでまた子どもの感性が高まっていく。

「風の中のアルミカンバード」は、毎時間ごとに子どもにはっとさせる意外性を与えながら時間をかけてじっくりと取り組んだ実践である。アルミカンという金属が紙のように切れる、紙のように工作できる、風が吹くと動く。これらは、子どもにとってとても新鮮な体験であった。廃品としてのアルミカンが子どもにとっては宝物のような価値あるものとなったことはすばらしい。そして、身近な街角の中にも、風が吹くと動く造形がたくさんあることを知ることで、再び製作への意欲が高まっていった。

また、カンディンスキーの作品を鑑賞してから不織布を切り、ポスカで着色した。「ふわふわクッション」の実践は、色彩や形がとても斬新なものとなった。カンディンスキーの作品から子ども達は見事に美的価値を見出したと言える。

「おもしろ発見隊」は、描く表現方法から離れ、カメラで対象を写真に撮る、図画工作科としては新しい表現方法で対象に迫ったものといえよう。いろいろな視点から対象を撮ることで、見え方の違いを子ども達はおもしろく感じ

たことであろう。「パラソルワールドを写そう」では、造形遊びとして傘で自分たちの城をつくったが、写真を撮ることで子ども達は、活動場所にパラソルの花が咲いているような感覚を持ったようだ。造形が環境に働きかけていることを実感できた。

日常生活の中で造形的価値を感じ取れるような環境づくりも、感性を育ませる大きな要因である。校内に名画を掲示したり、児童作品を並べ美的刺激を与え、心豊かになる。さらに実践では、名画が子ども達の自主的な模写であったのでさらに効果的であった。

「ストライプの中へ」は、エッシャーのだまし絵を糸口として「からくり」「錯視」の世界の視覚的な惑わされ方を利用した授業である。墨汁で描かれた友達のデッサンに縞模様を入れ2枚の質の違う絵が融合し、全く違う絵に変化する驚き。白と黒の対比が美しく、錯視の世界を楽しめ、視覚の不思議さを感じた。

また音楽を聴いてイメージを持たせる導入の「海からの贈り物」の実践では、技術に頼らず、ひらめきや感性で作品が作れたらという思いから、線材のみを使って製作した。聴覚に訴えて波の音、波に漂うようなイメージ、深海に潜むような音楽を、ストレス解消音楽や現代音楽からとってきて聴かせた。造形表現活動を生み出す直感力として働いたと思う。

実践を重ねるうちに、図画工作科そのものが感性を伸ばし育てるに適した教科といえるのではないだろうかという思いに至った。そして常に新しい見方、別のとらえ方を大切にして新しい価値を見出す努力が教師にも求められていると思う。豊かな感性を土台に、想像力、表現力を身につけた子ども、心豊かな子どもを求めてさらに歩んでいきたい。

そして自然の中で、社会の中で、たくましく生きる子どもになるように教師は支援していかねばならないと思う。

今後、私たちはさらに実践を積み重ねていきたいと思っている。

(西井)